

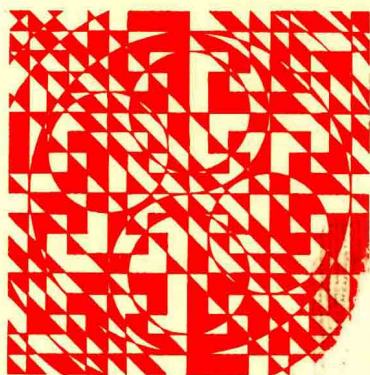
岩波講座

文学

11

現代世界の文学1

岩波書店



岩波講座 文 学

11

現代世界の文学 1

岩 波 書 店

〈執筆者紹介〉

- 野 間 宏 (のま ひろし) 1915 年生 作家 『真空地帯』『青年の環』
大江健三郎 (おおえ けんざぶろう) 1935 年生 作家 『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』『文学ノート』
津 村 喬 (つむら たかし) 1948 年生 社会評論 『メディアの政治』『われらの内なる差別』
黒 井 千 次 (くろい せんじ) 1932 年生 作家 『時間』『眼の中の町』
日 野 啓 三 (ひの けいぞう) 1929 年生 作家 『あの夕陽』『孤独の密度』
中 岡 哲 郎 (なかおか てつろう) 1928 年生 産業技術論 『工場の哲学』『コンビナートの労働と社会』
佐 江 衆 一 (さえ しゅういち) 1934 年生 作家 『闇の向うへ跳ぶ者は』『遙か戦火を離れて』
木 下 順 二 (きのした じゅんじ) 1914 年生 劇作家 『沖繩』『神と人とのあいだ』
沖 浦 和 光 (おきうら かずみつ) 1927 年生 文学思想 『マルクス主義芸術論争』『マルクス主義講座—「芸術論」』(編)
高橋たか子 (たかはし たかこ) 1932 年生 作家 『誘惑者』『失われた絵』
長 田 弘 (おさだ ひろし) 1939 年生 詩人 『長田弘詩集』『アウシュヴィッツへの旅』
種 村 季 弘 (たねむら すえひろ) 1933 年生 ドイツ文学 『壺中天奇聞』『吸血鬼幻想』
吉 増 剛 造 (よします ごうぞう) 1939 年生 詩人 『黄金詩篇』(詩集) 『頭脳の塔』(詩集)
金 達 寿 (キム タルス) 1919 年生 作家 『玄海灘』『朴達の裁判』
井 上 光 晴 (いのうえ みつはる) 1926 年生 作家 『地の群れ』『心優しき叛逆者たち』
土 方 鉄 (ひじかた てつ) 1927 年生 作家 『地下室』『浸蝕』
宮 原 昭 夫 (みやはら あきお) 1932 年生 作家 『誰かが触った』『あなたの町』
作 田 啓 一 (さくた けいいち) 1922 年生 社会学 『価値の社会学』『恥の文化再考』
堀 田 善 衛 (ほった よしえ) 1918 年生 作家 『インドで考えたこと』『広場の孤独』
矢内原伊作 (やないはら いさく) 1918 年生 哲学 『サルトル』『ジャコメッティとともに』
廣 松 渉 (ひろまつ わたる) 1933 年生 哲学 『世界の共同主観的存在構造』『事的世界観への前哨』
水 上 英 廣 (ひかみ ひでひろ) 1911 年生 ドイツ文学, 比較文化 『ニーチェの顔』『ニーチェ』
橋 本 峰 雄 (はしもと みねお) 1924 年生 哲学, 宗教学 『「うき世」の思想』『性の神』

岩波講座『文学』11 現代世界の文学 1(全 12 巻 第 11 回配本)

1976 年 11 月 17 日 第 1 刷発行 ©

1980 年 8 月 15 日 第 2 刷発行

¥ 1900

発行者: 緑川 亨 / 発行所: 〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5 株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111 振替東京 6-26240 / 印刷: 精興社 製本: 松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

岩波講座 文学 11

目次

I 現代とはいかなる世界か

1	現代社会の重層性	野間 宏	三
2	現代世界における危機の中での表現	大江健三郎	七

II 現代を構成するもの

1	情 報	津 村 喬	五
2	現代における個と集団	黒 井 千 次	九
3	文明の中の野蛮	日 野 啓 三	一八
4	機械と人間	中 岡 哲 郎	二五
5	民族性と土着性 ——その開かれた言葉を求めて	佐 江 衆 一	二九
6	歴史と伝統 ——一つの試み	木 下 順 二	三三
7	生物と人類	沖 浦 和 光	四三
8	性——女における魔性と母性	高 橋 た か 子	五三
9	死体について	長 田 弘	六二

10	幻想、夢——理性……………	種村季弘……………一五
11	内側から個を動かし規制するもの……………	吉増剛造……………二九
	——啄木「ローマ字日記」を中心に……………	
12	インターナショナルなもの……………	金達寿……………三三
13	官僚「社会主義」とファシズム下の表現……………	井上光晴……………三六
14	差別と社会構造……………	土方鉄……………三〇
15	環境破壊と人間破壊……………	宮原昭夫……………四五
	——おのれのうちなる昭和三十年代の克服……………	
16	近代化とニヒリズム……………	作田啓一……………五五
III 今日の危機的状况をどう受けとめるか(一)		
1	滑稽なる現代の悲劇性……………	堀田善衛……………七一
	——Les Expériences Vécues……………	
2	終末の文学と文学の終末……………	矢内原伊作……………三〇
3	人類史的危機と変革主体の昏迷……………	廣松渉……………三五
4	哲学という「嘆きの壁」……………	氷上英廣……………三三
	——危機的状况をめぐって……………	
5	宗教者は危機的状况をどう受けとめるか……………	橋本峰雄……………四七

I

現代とはいかなる世界か

1 現代社会の重層性

野 間 宏

記号理論と情報理論の結合の上に立つて象徴理論とシンボル理論を成立させる作業にはいるところへと、歩行と飛行と匍匐^{はうく}をもって到達しようとの試みをすすめてきた。しかしいま、私はその試みの意図を実現させるためにも、再びもとのところへと引き返さなければならぬ。戻り橋がすでにすぐ前のところにあること、しかも、私がその戻り橋の上をこのまま通過しようとしていたことが、私にはっきりと見えてきたのである。もとのところといえば、もちろんそれは現代社会のただなかということになる。

「現代文明の危機のなかの文学」(本講座第一巻)に於て、私は現代社会に生きる人間の足下に大きな深淵があり、それがよく眼をひらきさえすれば誰の眼にも見えること、しかも人間は、すでにこのかつて見ることのなかった大深淵のなか深く引き込まれ、身を浸していること、その皮膚系統、筋肉系統、骨格系統、内臓系統などばかりではなく、その神経系統の全体系、さらに生命現象の一切にかかわると最近明かにされてきている遺伝子をも、徐々に侵されるにいたっていること、しかもこれらの外的破壊・外破、内的破壊・内破をもたらしているのは現代資本主義の大工業生産であることについて素描した。そして私はその大きな深淵というのは、大工業生産の生み出した環境問題であることを示した。しかしその時すでに予想しており、また書物などにもよって理解していたことであるが、その後、社

会主義国に於ても、環境問題に限定して言えば、例外ではないことを、直接に、社会主義国のなかでも大工業生産計画に一応成功している東欧圏にあって、ようやく問題になってきており、われわれはこの問題に気附くのがおそすぎたと率直にというべきか、皮肉にというべきか、丁度、この二つの中間にあると云ってよい口調をもって、口にするのを耳にしたことを、ここにはっきり書きしるしておこう。環境問題は、いまや、地球のもっとも重大な問題としてあることは、いよいよ明確になっているのである。現代社会のもっとも深い層位に環境問題が据えられている。そしてそれはまさに環境の問題である。

この現代社会のもっとも深い層位に環境問題が据えられているとは、現在私の文学創造、理論と方法によって見定められているところであると言いつつかえることはない。もっともここにいたるには、自然科学者、現代生物科学者、原子物理学者、社会科学者とのいまにも息切れするかと思えて、しかも決してそのような結果を見ることなく、次へのひらかれた展望のなかに自分がおかれていることの明かになってくる、長い年月をかけた討論を必要としたことを明かにしておく必要があるだろう。それは私の方から求めたことであったが、その経過のなかで自然科学者もまた積極的にそれを社会科学者・文学者に同じようにこの問題について討論し、共同でそれに取り組むことを求めていることを私は知ることが出来た。このことを明かにしておいて私は次のように書くことが可能である。逆にまた私の文学創造の方法は、この環境問題を現代社会のもっとも深い層位にあるものとして、それに接近することによって、このもっとも深いと測定される層位のところに自身を潜航させて、この問題が、現代のその他の重大な問題とそれぞれの形で緊密にかかわるところを見とどけ、そこに根拠を得、そこに立って私の新しい創造方法として形成されてきている。

すでに書いたところであるが、私は人間を生理的(物理的)、心理的、社会的統一体としてとらえることを創造方法

の一つの中心にしている。しかしこの生理的(物理的)、心理的、社会的のうちの、括弧内の「物理的」のところは、将来みたとされると予測されるとはいえ、なおまったくの空虚そのままに、置かれてきていた。その空虚がはたしてどのようにみたとされるものなのかについては、その一寸した触知のようなものを持つことがあったにすぎなかった。私の半ば閉じたままでいた眼を全開させてくれ、括弧内の空虚を埋めることの出来るものとして、前衛的な分子生物学の急速な展開が、私の前に出現した時、長く待ちつづけていた私は、この現代生物学の出発点となったこの分子生物学に近づき、私の文学創造方法の空虚のままにおかれていた側面を埋めることとなったといえる。

私は「創造する力とは何か」(本講座第二巻)に於て、今日の時代、現代を大きな変動の時代と呼び、この大きな変動の時代をもたらしたものが環境問題であることを示した。このことは、いまここまでたどってきたところと、重なり合っている。環境問題を内にはらんでいる大きな変動の時代に、より強力、精密に迫るためにも、環境についてさらに、現代生物学が明かにしているところを、見なければならぬ。まず、取り上げなければならないのは、生態系についてである。

しかし生態系についての追及を始める前に、生物が成立する、生命をある時間たもつ生物が成立する、その生物の構造の形成は階層性をもっているということ、言い方を変えらば、生物の構造と機能は階層的に発展し、そこに生物の成立がなしとげられること、このことを把握しておく必要がある。この階層性の理論は、後で見ることにするが、社会の重層性の理論の支えになるかのようにも考えられるとしても、必ずしも、そのようにこの二つのものが調和するとは限らないのである。殊に現代社会の重層性という、巨大社会に於ては、そうなのである。『生命の物理』(岩波講座「現代物理学の基礎」9)の第一章「生命の基本的な型」の導入部の、生物の生命のもっとも重要な成立条件ともいふべきことについて触れ、その生物の生命への重要な入口であると考えられるし、また生命の成り立ちの中心の

ところであって生命を貫き生命の構造の特性ということのできる生物生命の階層性について述べているところに眼を向けよう。

現在、生物の生命はここにたくみにとらえられ、集約されているような階層性を持ちながら、しかもその階層性を、乱され、つきくずされ、入れ換えられ、破壊され、汚染されて、階層性は、はたして何処に行ったか、とらえがたい状態に、変形されてしまっていると考えられる。しかしその変形をよく見定めるにしろ、さらにまたその変容を、そして変形、変容をつみかさねてついに奇形として置かれているにしろ、その変形、変容、奇形、を見とどけるにも、生命の成り立ちを条件づけるとされるその階層性について、それがどのように生命理解の上で重要であるかを正確にたどっておく必要があるからである。

「物質系が素粒子から原子、分子、巨大分子、高次構造体へと構造の階層を積み重ねていくとき、ある階層で『生命』が現われる。生命とは何か。『生きもの』には物質的に一つの基本的な型があるにちがいない」というところに、この著者の根本的な理論がある。この理論にもとづき、つづいて生物の生命の構造の各階層とその階層に対応して存在する型についての考えが出されるのである。

この考えは今日、生命についての理論を受けとろうとする人々のなかにその理論のはらんでいる力を行きとどかせ始めていると私は見ている。この物質の階層性の理論は坂田昌一が最初に提起したものであると考えられるが、物質の構造の階層には一つのきまった型があるというところまで階層性の理論を發展させたそのところに、大沢理論があるといえるだろう。

生きものとは自己を複製し、増殖するもの、環境にに応じて行動し、生長し分化し、進化するものである。しかし、生命のもつ特徴それぞれは、分解してしまえば、必ずしも生きものでなければもちえないものではない。無

機物、生きていないものでも、自己を複製し増殖するもの、環境に應じて行動するものはある。それにもかかわらず、われわれが古代から、動物、植物その他をあわせて「生きもの」(中略)という名で、ある種のものを一つのグループとして統一的にとらえることができたからである。それはなぜか。

このように自ら問を発するという形をとっておいで、それになりたいする答を次に置くことになるのであるが、この問に答えるのはいたって簡単であるかのように最初に思うとすれば、それはやはり生命とはなにか、生物の生命活動の過程とはなにかについて、余り精密に考えようとの用意をととのえたことのないひとだろう。しかし今日、世界のすべて、一切の事を見、あやまることのないように、とらえるには、非常に精密を必要とする。さなければ今日の複雑にからみ合い、また人間一人一人にからみついている、生物発生以来の全問題が重なり合って、人類の足下をすくいあげようとして殺到している、或は人間の頭上のところ、くいとめることかなわぬ嵐となって横なぐりに到来している、問題を、全体として、とらえることにしくじるにちがいないのである。

いま、一寸、例をあげれば、著者が自ら問を発するという形をとって出した問のなかには、死の問題がふくまれているということである。このことに私は氣をくばってほしいものだと思うのだ。「生命のもつ特徴それぞれは、分解してしまえば、必ずしも生きものでなければもちえないものではない。」というこのところにある分解してしまえばという、この分解は死をもたらしものであるし、また逆に死によって起されるものでもある。分解は生命を分子・原子にかえし、しかも、それによって結合をとかれて各個別の存在となった分子・原子にかえし、その分子・原子をさらに粒子に、素粒子にかえすのである。その上この粒子をたえず生れまた消えている、生成し、消滅している粒子にとかえすのである。そしてこの生れまた消えている粒子というこのところにも生と死とがあるのである。このようなどころにも生と死とがあることを見ない眼などは、大きく開かれた眼とは到底いはいはしないし、主として人間の

生と死を生と死として、見てきた眼であるというべきだろう。しかしそのようなところから、その眼を引きださなければならぬのである。さもなければ、多くの謎が星々のように、ばらまかれてゐる現代の問題群を見出すことさえ、不可能事となりはてて、そのまま、歩いて、ついに針の山の上に倒れるということになってしまうのである。しかし私はそれらの人々の死を嘆くことはしない。しかし生と死について、これをどのようにとらえるかというところに行くつくには、遠い道を歩かなければならない。しかしいくら遠い道を歩いたからといって、落ち葉におおわれたままになって動くことのない仮死の状態になっているものを、死のなかにはいったものとしてうちすててしまふところから立ち去ることになる、またなりうるとは限らない。

さきから問題としてきた、自らの問を發する形をとって、その答として置かれたものを、次に引く。

素粒子から原子、分子と構造ができていくとき、『原子』という構造の階層には一つのきまつた型がある。プラスの電荷をもつ原子核のまわりを一の電荷をもつ電子が運動しているという型がある。この型を共通のものとして原子には非常に多くの種類があり、それぞれがある程度ずつちがった性質をもつ。この原子が結合して『分子』を作るとき、ここにも一つの基本的な型がある。このような基本的な型ができ上がったときが、いわば『原子』や『分子』が誕生したときである。

同じように生きものにも基本的な型があり、それが成立したときが、生命の誕生したときである。それではこの基本的な型とは何か。その型を作りあげている二つの主役がある。核酸分子とタンパク質分子である。

ここに言われていることに、理解困難なところはない。著者はここからさらにすすみ出てタンパク質分子の基本構造「アミノ酸の一定配列による立体構造を明かにし」、「これらの巨大分子、核酸とタンパク質が組み合わさって『生きもの』の基本的な型が形成された。すなわち、『生きもの』は構造の階層でいえば、『巨大分子』の階層で発生した」

ことを、見とけてみせるのである。

私がついで明かにしておかなければならないのは、生物の生命活動と環境との相互作用についてである。これをたどることなくして、環境についての精密な理解に達することは出来ない。それは一応『生命の物理』第五章「運動」のところであらえられている。

生物の運動という機能は、構造のいかなるレベルで発生するか。何度かのべてきたように、タンパク質分子は自分自身運動できる。熱的に揺動し、また環境との相互作用によって構造変化する。酵素機能のもとにはこのような分子の運動があり、基質の一反応ごとに酵素分子はサイクリックな運動をする。生物の運動は、化学エネルギーの力学的エネルギーへの変換を意味する。そこには、酵素作用と同様のタンパク質分子の運動が存在するであろう。このようなタンパク質分子一個一個の運動を基礎にしながら、生物の運動は、タンパク質分子の集合体の集合という構造のレベルで発生するのである。

このようなタンパク質分子が自分自身で運動ができ、環境との相互作用によって構造変化する、生物の運動はタンパク質分子の集合体の集合という構造のレベルで発生すること、これらのことは、筋肉の研究を通じて解明されてきたことが、つづいて述べられている。生体運動系としての筋肉である。筋肉にあつては、その機能が完全に分化しており、収縮したり弛緩したりする動きを行う系、それを調節、命令する系、エネルギー源を供給する系、これらになう物質系、すなわち分子系は完全に分化している故に、分化があまりみやすすくない下等生物（アメーバーなど）にくらべて、研究しやすく、筋肉について、運動機能発生のレベルがとらえられたのである。

生物と環境の相互作用について問い、私は、この『生命の物理』第一部の著者が、生物の物理学が、今後いかなるところに到達しようとしているかについて、自己省察を行っているところにはいつておきたい。それはこのような無

機物、素粒子から原子、分子、……の無生物界から生物界へ、さらに人間へ至る、生物物理学が、現在到達した地点に於て、これまでの到達したところをふりかえり、その将来を見渡しつつ、今後そこに成立するものを遠望しながらも、なおそこに築きあげた基礎そのものの堅固さを確認するとともに、その基礎の上にたつて、これまで用いてきた方法と思考の領域をそのまま、延長し拡大するだけでは、もはや、次の未知の世界へと自身を導き入れることは不可能ではないかという、大きな疑惑におそれながら、その疑惑そのものを、方法と思考の発条とする、科学が自身の到達点を測定して、その位置を決定するところに、自身を置いたことを、見ることが出来るからである。

下等生物の行動に関する限り、その完全に物質的な分子論的な理解はまもなく可能となるであろう。そのとき目的論的理解はこれら生物については不必要となる。さらに高等な生物に同様の研究をおし進めていったとき、途中に何ら特別の断層を予想する必然性はない。高等生物の行動もまた、いつかまったく分子論的にとらえられるときがくるであろう。このような研究に当たって、個々の行動の分子的機構を統一的にみて、行動の基準としての何かがとらえられるであろうか。

無生物の世界では運動ないし行動の基準はいろいろのレベルでとらえられている。単純な物体運動については力学の方程式で、位置エネルギーの低い方へという「エネルギー」という基準がある。多くの系の集合体のレベルでは熱力学によって、エントロピーの大きい状態へ、自由エネルギーの低い状態へと、エネルギー一定とか、温度一定とかの条件にしたがつて、状態変化の方向を示す基準となる量がみつけれられている。生物の行動において同様の基準となる量が存在するであろうか。エネルギーやエントロピーなどを基準としてその基準に合うようにという原則を破ってはいないけれども、それ以外に何かの基準をもっているか。あるいはそれ以外に何かの基準が必要なのではないか。(第七章「行動」)

この終りのところに出されている問は、この生物物理学者の研究が、一つの到達点に達した時、もはやそれ以上、いかにその延長線上を同じ調和のある足どりをもって、歩いて行こうとも、その到達点をこえて、その向う側にあると考えられる法則、或はその法則によってもたらされる基準が見出されるのではないかという、これまでとはちがった基準の必要性にたいする問である。この研究の、このところにさしかかったの事態は非常にシリアスであることを私はひとめざるを得ない。しかし研究は、このようなところに行きついて、呻きを発するようにして、次へと出て行くことになる。しかしこの時、「あるいはそれ以外に何かの基準が必要なのではないか」というような、これまでの基準とは、範疇を異にする、さらに上位にある基準へと開きはじめた眼が、薄明のなかに光が闇か、いずれから発する光を見定めようと活動を開始しているのである。

この生物物理学者は、さらにその問を一層具体的に、具体物とかかわらせて、次のように広いところへとひろげる。平衡状態の熱力学について、非平衡状態、主として定常状態の熱力学が発展して、定常状態のあり方について、もしそれが平衡状態に近ければエントロピー産生速度の最小原理という基準があることを示した。生物の行動の場合にはたして適当な量を見出しうるか。すでに何度かのべたように、生物は、エネルギー的にもエントロピー的にもほとんど差別のつかないいろいろの可能性から何かを選択する能力をもつ。バクテリアの自由エネルギーが糖の濃度に依存し、そのために走性がみられるとは考えられない。バクテリアがどちらへ方向変換するか、まったく同様の可能性をもつようにみえながら、何かその頻度や角度のわずかの差があって、その差が積み重なって方向性を生む。偶然をもとにした多種多様の試みをくりかえしながら、徐々に何かが生長する。何を生長させるかの判断の基準を物理的にとらえる概念を探し出せないか。

生物物理学が自己が立っている基盤、足場を踏みはずすことなく、下等生物から高等生物へ、さらに人間へとのぼ